

することに今後の研究の力点が置かれる必要があるだろう。

日本での成長管理研究は、成功事例の紹介

から全面的・批判的研究に進むべき時期にさしかかっているのである。

(金沢大学経済学部講師)

CURES Report

インド滞在記 -1992. 10~1993. 4-

林 宥 一

1. 私は1992年10月はじめから翌年4月末までの7ヶ月間、デリー大学の中国・日本研究科の客員教授としてインドに滞在する機会をもった。大学での主な義務は、日本近現代史を教え、日本国内の研究状況を紹介することだった。けれども他方、わたしは日本近現代史の教師としてだけではなく、自分もインドの歴史と現状をシロウトなりに学びたいという、留学生のような少々欲張った望みを持って赴任した。

幸いインドは1986年に1ヶ月の滞在経験があったし、周囲の人々はみな大変親切な方であったので、日本とかなり条件の異なる生活環境に慣れるのには時間はかからず、日常生活は順調にスタートした。またこの数年間、自分なりにインドについて少しずつ「密かな」勉強——もちろん専門研究からはほど遠いものである——も続けていたので、「留学生」への潜入も努力次第では可能なことのように思われた。

だが、教師としての義務はともかく、私の「留学生」志望は残念ながら甘かったと言わなければならない。赴任以来、この国で継起したさまざまな問題は、どれをとってみても日本でいえば「今年の10大ニュース」の上位に入るような重大さをもっているように見えた。しかも、そのすべてがインドの歴史と社会構造に深く根ざした事象であってみれば、外国人としての私には、その一つ一つの概要を理解するだけでも短時間では困難なことだった。

こういうわけで、私は一方で、インドとい

う歴史と社会の巨大で複雑・多様な世界の中で、たかだか7ヶ月という短期間であまり欲張ったことを考えても所詮「群盲象をなでる」の域を出ることはできないのではないか、という無力感を味わうことになった。

けれども他方、私は滞在約3ヶ月を過ぎた頃（つまり1993年の新年を迎えた頃）から、この国の新聞や雑誌が“昨今のインドは1947年の独立以来の歴史的転換点にたっている”というたぐいの論調を盛んに展開していることに気づき始めた。それは例えば、「歴史には国家の魂というものが減びてしまうような瞬間がある。インドにとってそれは1992年12月6日午後にやってきた^①」、「1992年という年はインドにとってかつてなく重大な年であった^②」、「独立後45年の歴史のなかでインドが今日直面している危機はかつて経験したことのない深刻さと広がりをもったものである^③」などの論調に象徴されていた。そしてこれらの記事は、インド共和国存立の基本理念である政教分離にもとづく民主主義（secular democracy）の脆弱さが露呈し、国家としての統合と一体性（unity and integrity of the nation、憲法前文のことば）が解体の危機に直面しているという認識ではば一致していた。こういう状況のもとで、かつての東欧諸国やソ連邦がたどった国家分裂・解体の道程のうちにインドの未来をみたり、或いは又、今日のインドにおけるコミュニズムの状況を印パ分離以降（つまり独立以降）最悪とみなし、ヒンドゥー原理主義の急速な台頭を1930年代のナチス・ドイツのそれに比較してみ

たりする議論がしばしば行われていた¹⁰⁾。

私はこういう記事に触れるにつれて、現在のインドがかかえている諸問題の把握が難しいのは、何も自分が外国人であるためだけではないのではないか、この国の人々もまた、独立以来の基本理念が大きく動揺するような危機に直面し、次々に生起する新しい難問を前にして暗中模索のうちにあり、したがって、改めてその歴史と社会の再検討を迫られているのではないか——こんなふうにも感じるようになったのである。

2: 独立後半世紀をへて、インドの人々の生活水準は植民地時代の負の遺産と闘いながら徐々に向上してきたとはいえ、今なお、国民の40%が貧困境界線 (poverty line) 以下にあり、約半数が読み書き能力をもたず、70%が公共的社会施設の無い農村に住んでいる¹¹⁾。しばしば報道される非人間的事件 (例えば子供の奴隷的売買や女性へのさまざまな形での虐待など) はそのような状況を前提としているといえよう。カースト差別解消のための努力もこの国の基本政策として展開されているが、差別はまだ根強く残っている。

問題は「伝統的」貧困にとどまらない。私は大都市デリー (1991年現在の人口約940万) に住んでいたが、そこにみられたのは、大気汚染をはじめとする環境破壊や交通事故など近代化・都市膨張に伴う生活条件悪化の深刻さと都市的公共施設の立ち遅れであり、criminalizationとかlumpenizationとか表現されている犯罪や暴力の激増であり、これら累積する諸課題に有効に対処しえていない行政・官僚組織の姿だった。

けれども昨今のインドが“独立以来の危機にある”という場合、この「危機」の構成要因は、いわゆる発展途上国が多かれ少なかれ共有している困難な条件だけでは説明できないように思われる。



▲ デリー大学の学生たちと。壁には「コミュニナリズムを駆逐し、政教分離主義に立て」と書いてある。

国内問題に限っていえば、私の滞在中に最も頻繁に新聞に登場した論点は、①ヒンドゥー原理主義の高揚によるコミュニナリズムの問題、及びそれにかかわる政治的・社会的対立と暴動、②被差別カーストや少数民族及び other backward classes と称される経済的下層への公職採用優先政策に関する最高裁判決 ('92. 11. 16) をめぐる対立と論争、③マンモハン・シン蔵相による経済改革 (自由化・市場開放など) 路線をめぐる諸問題、④政権与党のインド国民会議派内部における政争などである。いずれもきわめて深刻な対立と論争をはらむ問題であるが、今そのすべてについて言及する余裕はない。だが、このうち最大の国内問題となり、さらに大きな国際的波紋をよび起こしたのは何と言っても①の問題に他ならない。

事件拡大の直接のひきがねになったのは、昨年12月6日 (事件後しばしば「暗黒の日曜日」と称されている)、北インドのウッタル・プラデシュ州アヨーディヤでのヒンドゥー原理主義者によるイスラム寺院バブリー・マスジッドの破壊である。これをきっかけに独立以来最大規模と称されるほどの暴動・騒乱が全国各地に広がり、12月中旬までにボンベイ、デリー、ジャイプール、アーメダバード、ボパールなどの暴動での死者は千数百人にのぼった。

12月下旬から新年にかけて状況はやや落ち

着いたと思いきや、今度はインド最大の都市ボンベイでシヴ・セーナというヒンドゥー原理主義の急進的団体に動員された暴徒によるイスラーム教徒（ムスリム）への大量殺りく、焼打ちが展開された。これはナチス親衛隊のユダヤ人迫害を思わせるような狂気にみちた襲撃であって、ボンベイのヴィクトリア・ターミナス駅は数万人の脱出・避難民であふれた。

さらに3月12日、ボンベイの証券取引所・エア・インディアビルなど経済活動の中核13ヶ所に仕掛けられた高性能爆弾が次々と爆発し、約1,800名の死傷者が出るという事件が起こった。同月17日にはカルカッタでも爆弾事件が起こり50名以上が死亡した。

このうち3月の爆弾事件はイスラーム原理主義者の国際組織によるテロリズムとみられ、インド当局はその主謀者がパキスタンに潜伏しているとして犯人の引渡しを要求している。しかしいずれにせよ、これら一連の暴動・テロが相互に密接な関連をもっていることは明らかである。そしてそれは、インドの政治・経済にきわめて大きな打撃を与え、その進路に暗い影を落とす事件であった。

3. これらの事件はいずれもコミューナリズムの問題と深くかかわっている。コミューナリズムは欧米諸国では「地方自治主義」などの意味で用いられることが多いが、インド現代史の脈絡では、それぞれの宗教的コミュニティの利害を最優先する排他的な政治的イデオロギーを意味する。そしてそれはイギリスの植民地支配政策（divide and rule）の負の遺産でもあった。それ故、多宗教の共存を前提として存立するインドの国家と社会にあってこのイデオロギーは常に否定さるべき克服の対象であった。インド独立運動の最大の課題の一つもこのコミューナリズムといかに闘うかにあった。そういう意味で現行憲法がかかげる政教分離主義（secularism）は独立運動の所産であるといえよう。

このようにインドにおけるコミューナリズム

の問題は独立以来の歴史をもっている。しかし昨今のコミューナリズムが新しい様相を帯びて登場しているのは、インドの宗教において絶対多数を占めるヒンドゥー教徒の利害を政治・国家に反映させようとする政党・団体が政権与党の国民会議派をおびやかすほどの急速な勢いで成長を遂げ、しかもそれが、これまでにないほどの排他的主張（憲法改正をふくむヒンドゥー国家としての根本的再編）を展開して民衆の支持を得てきた点にある。具体的にはB J P（Bharatiya Janata Party、インド人民党）とこれを支えるV H P（Vishva Hindu Parishad、世界ヒンドゥー協会）、R S S（Rashtriya Swayamsevak Sangh、民族義勇団）がその勢力である。特にB J Pは下院における1991年の総選挙で驚異的な躍進をとげ（117席、1989年選挙では4議席）、今や与党国民会議派（245議席）に次ぐ野党第一党の地位にあり、1992年末の世論調査では現在総選挙があればさらに数十議席の増加が見込まれている⁶⁶。

このヒンドゥー原理主義の抬頭は、与党国民会議派の政治体制への不満や経済の自由化過程でとり残されつつある農村部（特にヒンドゥー・ベルトと称される北部インド）中間層の不満などと結びついているようであるが、いずれにせよそれは現代インドにおける政治的・社会的構造の変容の問題として把握されなければならないであろう。だがこれは現在の私の力量を超える課題である。

ただ以下の点だけでは指摘しておきたい。私のインド滞在期間は新たなコミューナリズムの台頭を背景とする悲惨な事件の連続であった。そこから受けた率直な印象は、インドの将来は明るくない、この国の政治的・社会的危機はますます深刻化するのではないか、ということだった。しかしそれにもかかわらず、同時に私が感じたことは、この国で進行している事態はヒンドゥーやイスラームの原理主義の高揚だけでなく、これに反対して互いに異なる集団との平和共存のうえに調和のある社

会を築いていこうとする民衆のエネルギーと運動がいたるところに噴出していたということである。

この点はインド国外のマスコミ報道（日本をふくむ）などにしばしば欠けていたことなので強調しておきたいことだが、ふつうの民衆のあいだではどこでもヒンドゥーとムスリムの敵対・対立が一般的なのではない（むしろ伝統的には異教徒どうしの融合・調和・共存、つまり異質な他者に対する寛容がインド社会の特徴であった）。たとえばアヨーディヤ事件後、ヒンドゥーの巡礼の聖地ヴァーラーナシーではヒンドゥーとムスリムの合同の市民グループが組織され対立・暴動が未然に防止されて平穏であったし、カンブール、ボンベイ、アラハバード、モラダバード、アーメダバードなどでもふつうのヒンドゥーとムスリムが手を取りあって理性と友愛による宗教的共存を訴え、コミュニズムの爆発を抑止しようとする動きが活発に見られた⁽⁷⁾。異教徒どうしが何十年も一緒に住んできたボンベイの或る大棟割長屋（chawl）では、ヒンドゥー・ムスリム・クリスチャンなどが一緒になってヒンドゥー原理主義者の襲撃に対してテラスから石やレンガを投げ、さらにこれが尽きると水にとかしたマサーラ（カレー粉）を投げて敵の目をつぶして抵抗した（そのためこの地域のマサーラの値段は急騰したという）⁽⁸⁾。カルナータカ州のように州政府のよびかけによって学校の子供たちや多くのボランティア組織の人々が手を取りあって「人間の鎖」をつくり、平和・友愛・相互理解のための行動を起こしたところもある⁽⁹⁾。

これら草の根レベルの民衆運動の例は挙げればきりが無いが、インドではこういう民衆レベルでの良識と友愛と勇気のある社会的行動が満ちあふれているのである。インドの将来はたしかに明るいとはいえず、その社会も



▲ ファーテプル・シークリ城にてバナナを売る子供たち。

日本にくらべれば貧しく悲惨なことを見聞することの多いのも事実である。だが同時に、コミュニズムの問題だけに限らず、人間愛と良心のあかしをいたるところに発見しうるのもインド社会であって、そこに希望の光がある。一転、わが日本をふりかえてみるに、「豊かな社会」を築きあげたにもかかわらず民衆の社会的エネルギーやそこから生まれる人間的な関係が著しく摩滅し衰弱しつつあるように思われる。かえてそこに寒々としたものを感じるのは私のインドびいきのせいであらうか。

(1) "Letter from the Editor", India Today Dec 31, '92.

(2) "Editor's Note", Current Essays, vol.3 Jan. '93.

(3) "Saving India's Soul", The Times of India Feb 12, '93.

(4) たとえば、"Road to Facism", Frontline, Jan 1, '93. "Dangerous Dimensions", India Today, Feb 15, '93. "What is Hindu Rasht-ra?", Frontline, March 12, '93.

(5) Edited by Bimal Jalan; The Indian Economy, Viking '92.

(6) India Today, Jan 15, '93.

(7) India Today, March 15, '93.

(8) "Blocks of harmony", The Sunday Times of India, Feb 14, '93.

(9) Frontline, March 12, '93.

（金沢大学経済学部教授）